

4/19 福島の集いで、私たちの生産者に出会いました。

山形「しらたかノラの会」のみなさんからのアピール

世話になってきた大地の苦しみを受け止め、
共に泣き、大地の再生を準備しよう。

今、私たちがいるところは確かに危険だ。でも汚染のどの段階が住める処と住めない処の線引きラインなのかと言うと、福島はもとより、山形・茨城・群馬・栃木・宮城も、そして東京・埼玉・神奈川までは、50歩100歩でしかない。十分すぎるほど危険だ。

少しでも危険性が低いところへ行くとしても被曝の確率の多少であって、1000人のうち2人と20人では確かに10倍だが、2人の中にあなたが当選する事も無いわけでない。その2人に入ってしまう不安を抱えて怯えて生きるより、20人の仲間と共に耐え、大地の再建と再生を掲げて共に引き受けていくほうが人間的な行動ではないか。

放射能避難民への差別が始まっているという。結婚差別や居住の嫌がらせ、就職差別などあらゆる差別が放射線測定値のある線引きラインを境に行われるだろう。外に出れば差別にさらされる、もしくは差別を容認してひっそりと隠れて生き続けることになる。

私たちはこの地に踏みとどまる事により、差別と無縁の社会を築けるし、またそうしなければこの豊かな共同性で、核と原子力と決別して、平和で安心して住める社会を作り上げることは出来ないだろう。

それでも不安を抱え、子育てに少しでも危険性を低減させたい若者もいるだろう。止めることは無い、むしろ地域や家族の絆を捨てるように後押ししたほうが良い。彼らもわれらの仲間だ。彼らが異郷で差別にあつて故郷を思い出し、帰ろうと思ったとき、彼らを迎えられるほど、浄化された大地を取り戻す事に全力を尽くそう。

地球上どこも大地だ。度重なった核実験は、今回の事故と比較しようが無いほどの放射能を撒き散らした。その経験を受け止めなかった人類の歴史へ、今我々が遅く引き受け、生き抜くことで希望と勇気のメッセージを届けよう！

2011年4月19日 福島集会へのアピール
山形県白鷹町 杉沢区理事 大河内次雄(しらたかノラの会)

【福島の現地から】4.19 現地緊急交流会

ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリ、そしてフクシマの今、現実には。

福島から世界のみなさんへ

「まだ、まにあうのなら」

放射線から生命を守り、大地の再生を誓うフクシマ現地住民集会

しかし…「子どもたちが…」「大地が…」「どうすれば…」

すぎるような質問。かすかな望みが砕かれる現実。不安と失意。絶望…。



若いお母さんからの質問、農業者からの質問に、チェルノブイリの教訓をふまえてひとつひとつ丁寧に答える河田昌東先生(チェルノブイリ救援・中部)。しかし放射線の現実には重く苦しい。そばに添っているだけでも言葉を失ってしまう。多くの死と、遺された生きとし生けるものにこんな苦しみを背負わせる人類の過ちの歴史とはいったい何なのか…。

■3月11日から間もなく2ヶ月が経とうとしている。首都ではもう何事もなかったかのような平穏と、マスコミとインターネットでの評論ばかり。そして茨城や千葉の野菜は拒否され、国からは「消費者の信頼を損なう」とされる。

■私たちの生協のお母さんの母乳からさえ放射能が検出されている以上、福島の子供達は大丈夫なのか、お母さんは大丈夫なのか…国は何をしているのか。そんな想いで記者会見発表してもマスコミの断片的興味本位の報道で誤解して伝えられたり。何とも悲しい国だ。

■首都圏の電力のために、どうして福島の人々がこんなに苦

しめられなければならないのか…。いっそのこと、電力をいちはん消費している当の首都に放射能が降り注げばよかったのになどと、心がねじ曲がる。

■この間、組合員のたくさんの方の気持ちを胸に被災現場に入り、私たちにできることを努力してきました。しかし、あまりにもその傷は大きく、原発事故による放射能汚染はあまりに人々の身体と心を絶望の淵に追いやるかのようです。

それでも現地にとどまり「子どもたちを放射能から守ろう」「大地の再生を準備しよう」と勇気を振り絞って生きようとする人々の声の一端を今週は紹介します。(大石)

悲しみと絶望を乗り越え、共に生きる希望を。

被災・被曝・汚染を共に引き受け、これから長期のいのちと自然の再建・復興を支える。

産地災害復興支援基金 (1口 500円) No. 467

○注文用紙のこの番号に「1」と記入すると500円、「2」記入で1,000円となります。月次の請求で自動振替させていただきます。

【東日本大震災・福島原発被害一産地状況(第5報)】

	産地名	所在	復興状況・生協からの復興支援
岩手県	コタニ(産地) 	三陸町 綾里	○電気・ガスはいまだ不通ですが、現地社員がみんなで力を合わせて自力で瓦礫撤去、工場内の津波泥砂を撤去。内部の壁や階段の補修が残っているが、 電気さえ通れば海藻乾燥機が再稼働できる見通し まで来ている。 ●4/21商品部・藤田、先発隊で現地入り。見舞金と組合員からの励ましメッセージを届ける。4/22～23、丸山専務・柿崎理事、石巻経由で発電機等を搬入。発電機は喜ばれ、ご近所も含めて使用へ。
宮城県	高橋徳治商店 (練り製品)  	石巻市	○石巻港周辺は主要幹線は自衛隊によってきれいになりつつあるが、一歩中に入るとまったく手つかずの状態。地盤沈下で一日2回浸水状態が続き、4/20の満月高潮時はひざ下まで浸水。工場内も下水から海水が逆流。 ●4/16、常総生協役員10名、東京の担当SE、神奈川やまゆり生協職員、生協職員友人、地元あいコープみやぎ役職員、+茨城有機農業研究会・魚住さんから5名+栃木金澤建材12tユンボ・ダンプ専門家部隊6名、 総勢30数名で本社工場へ 。組合員からの見舞金・支援金とあわせて激励メッセージも手渡す。 人海戦術で工場内ヘドロ撤去作業(生協チーム)、旧北上川から水をポンプで汲み上げ津波の塩水に浸かった工場内機械を洗浄(茨城有機チーム)、重機で瓦礫撤去・搬出(重機チーム)。土浦ミートパル村山さんからは簡易トイレの提供を頂く。 有機農研部隊は1泊して翌日夕方までポンプで河川水を汲み上げ工場内機械洗浄作業。常総大石率いるユンボ・ダンプチームは4/21まで現地に残り、瓦礫撤去・倉庫内ヘドロ・原料在庫除去作業に従事。茨城塩屋さんチームが4/20支援物資。
	まるたか水産 (生かき)	石巻市 萩浜	○冷凍庫は残った。カキ漁師は全員無事が確認できたが、漁師さんたちの自宅の多くは津波で流され、まだ避難所生活が続き、船もなくなり漁は再開できていない。 ●4/16、生協からコメ、冷凍食品・日用品を浜の避難所へ配給。 
	黒澤さん	湧谷町	●4/22商品部訪問。ちょうど毎年恒例、田植前の地鎮祭 → これまでに石巻や三陸に2000食以上の炊き出し。
福島県	大木大吉本店 (蔵の素)	西白河郡 矢吹町	○築100年以上の家屋の 土壁と屋根が崩壊 。蔵の中の100のタンクのうち20が倒壊。 ●4/22商品部藤田訪問し、組合員からの見舞金と励ましをお届け。
	山木屋牧場 (ノンホモ牛乳)  	川俣町	○石岡鈴木牧場より全国からの牧草支援活動の提案あるも、 山木屋地区が「計画的避難地域」に指定 されてしまい、2ヶ月以内に判断を迫られる。牛といっしょに牧場移動、牛の預け入れ等も検討しているが、室内に閉じ込めていた牛の体調悪く、すでに数頭死亡。 ●山木屋チーズ・アイス応援企画は、組合員の圧倒的支援で1回でなくなりそう。 ●生協からは、いったん家族みんなで守谷に転居の上、生協の仕事を手伝ってもらいながら、 5年計画での牧場再生計画 を提案。3年がかりで牧場ならびに牧草地の除染計画(汚染土壌の重機による除去、菜の花等によるセシウム吸着除去、ゼオライトの投入)。4年目から再度仔牛からの育牛、最短5年で山木屋牧場再建を進言。しかし、これまで牧場内で命をつないできて外からは仔牛を買ったことのない高橋牧場ゆえ、いっしょに暮らした牛を見捨てる気持ちにはなれない様子で、育てた牛といっしょの移動先を探しているが、広い牧場はなかなかない。
茨城県	鈴木牧場 (ヨーグルト・チーズ)	石岡市	○生協との協議で、 草地土壌の放射能除染作業 を5月に集中的に行うことを確認。現在牧草地(4町歩)で育てているイタリアン・ライグラスは牛に与えず、5月刈り取り・ロール化して密封し放射性廃棄物として処理する(廃棄場所は東電本社か?)。汚染表土(約10cm)を除去・隔離し、ゼオライト投入等を判断し、6月サイレージ用トウモロコシの播種までに土壌の放射能を高度に除染する。不足する牧草分を品質の良いオーストラリア産牧草でつなくこととした。 ●牛乳プラント建設に向けた設備・衛生管理等の共同事前調査を開始。
	塩屋+大湊沼漁協+久慈浜丸小漁協+茨城の有機農家		●塩屋さんの呼びかけで、5/4(みどりの日)東京夢の島で、大湊沼漁協・久慈浜丸小漁協青年部・八郷の仲間(有機野菜)、常陸大宮の有機農家で「 風評被害をぶっとばせ! 茨城の美味しい魚と野菜を食べよう! 」を開催予定!
	茨城有機農業研究会		●毎週土日を中心に、新鮮な野菜が不足している被災地へ有機野菜を届ける支援運動を継続。常総生協の被災生産者支援まで。元常総生協職員で福島喜多方の実家に戻って有機農業をはじめた小川君が 原発避難区域境界の南相馬 にボランティアに入って献身しており、そのルートで茨城の有機野菜を毎週南相馬住民に支援。

4/19「まだ、まにあうのなら」福島集会アピール

今、福島は、大震災。大津波、原発事故の三重の災害の中にあります。東北の2万人をも越える尊い命が失われ、傷つき、そして今この時も、福島原発からは放射能が放出され、たくさんの原発作業員の方が被曝しています。国際的な事故評価でチェルノブイリ級のレベル7とされた今回の福島原発事故。



主催者として集会アピールを読み上げる大内有子さん。
1990年3月11日、福島で「放射能から子供を守る会」(現 福島・未来塾すばる)を結成。長く活動を。「3月11日に運命を感じる」と。

実は、昨年6月17日に、第一原発2号機でメルトダウン寸前の事故が起きていたことは隠されていました、その時も、非常用ディーゼル発電機が作動せず、電源喪失となり、冷却系ポンプが15分間も停止していたのです。まさに、今日の危機は必然であり、東電の引き起こした人災です。

プルトニウムとウランの混合燃料を使用していた福島第一原発3号機が爆発した時、息子が言いました。「お母さん、これから何が起きるの?」
母親は、この問いに、何と答えれば良いのでしょうか?

私の家は福島市で果樹園を営んでいます。畑ではもうすぐ、梨やりんごの美しい花が咲き始めます。

先日、原発から40キロ離れた飯館村の農業者から、問い合わせの電話を頂きました。「大内さん、真実を教えてください。福島県が招いた放射線リスク管理アドバイザーの山下俊一先生の講演を聞いて安心していました。先生は『今の放射線量であれば、何の問題もない。20歳を過ぎると放射線の感受性はゼロになる。特に男は心配いらないので、逃げることなく、会津の白虎隊の様に戦うべきだ』と話されました。なのに、なんで今さら、避難なのか。この一ヶ月、飯館村にいた子ども達の被曝は大丈夫なのか?」と涙ながらの訴えです。

飯館村の土壌には、チェルノブイリで強制移住となった地域の4倍の放射能汚染があり、その影響で原発爆発から3ヶ月後も、平常時の約400倍の放射線が出続ける可能性がある、報告されています。(京都大・広島大の現地調査結果)

赤ちゃんを産んだばかりのお母さんからも連絡がありました。「大丈夫だといわれて、ずっと母乳を飲ませていました。3月12日の水素爆発から一週間、福島の子供や大人は、水や食糧の配給の列に並んで、無防備のまま放射線を浴び続けました。逃げるためのガソリンさえ無い状態でした。私たちは、実験モルモットではないのです。子どもを守るために、本当のことを知りたいです。」

本日、この飯坂の地で、たくさんの皆さんと原発事故の真相と福島のこれからを学び、語り会えることに心から感謝いたします。

福島は母親は子ども達に、こう答えます。「浜岡でも、柏崎でもなく、福島のこの地で原発事故が起きたことで、私たちは大きな使命を与えられたの。福島第一と第二原発を必ず廃炉にし、私たちは原発の生き証人となって、世界中に反核を訴える。福島は大きな仕事を与えられたね」と。

心と心合わせて、命をつないで、7世代後の子ども達が幸せに暮らせる福島を思い描いて、今日、希望の一步を共に創り出してゆきましょう。

2011年4月19日 福島・未来塾 すばる 大内有子 (福島市笹木野字内畑在住)

※大内有子さんらの「放射能から子供を守る会」の活動を報じた21年前1990年3月11日の新聞記事をぜひお読み下さい。